

図書館との付き合い

情報通信工学科 梶 久夫

企業での35年余のサラリーマン生活を終え、昨年4月に本校に勤務を始めて以来、今までの人生の中で最も図書館を利用したのではないかと思う。そこには図書館に通わざるを得ないという事情もある。

図書館の利用回数は月に2、3回といったところであろうか。

小、中、高校、大学では図書館をあまり利用しなかった。企業に入ってから同じであったが、本校に来て図書館と付き合う頻度が多くなった。図書館を利用することで授業の準備もスムーズに行き、図書館には感謝している。

図書館で借りる本は私の担当する工学実験や卒研関係の基礎的なものが多い。街の本屋さんには基礎的な分野の本の種類は少ない。本校にはそれに関わる本が豊富に揃っているので大変助かっている。その豊富さは本校の歴史を物語るものであろう。

実験の場合、1テーマにつき3、4冊借りてくる。それらの本を比較しながら読むとテーマの内容やポイントがはっきり見えてくる。複数の本の比較による内容の吟味、いわゆるクロスチェックの重要性を改めて認識している。

現代は高度情報化時代といわれている。図書館には多量で貴重な情報が保管されており、昔から情報化に貢献してきた。今は、情報検索がインターネットで簡単にできるようになったが、その情報は断片的であり、信頼性も落ちる。確かな情報は内容の充実した本に頼らざるを得ないので、図書館の重要性は不変である。

学校は学生や先生が新しい情報を手に入れ知識として蓄積していく場所である。情報は簡単に理解できるものではなく、幅広く調査していくうちに理解がすすみ、知識としてわが身についていく。図書館はこの調査作業をサポートしてくれる非常に優れた場所と考える。多くの本があるので調べやすい環境を提供してくれる。わからないことを人に聞くことは簡単ではあるが忘れやすい。

27才の頃、会社で分からないことは人に聞かずに自分で調べると上司が部下に指導しているのを近くで聞いていたことがある。含蓄のある言葉だと思い、できるだけ実践している。安易に人に聞くことに頼らず自ら手間をかけて調べることを学生時代にぜひ習慣にすることを薦めたい。

よく経験することであるが、図書館や街の本屋さんなどたくさん本が並んでいるところに行くと不思議と読みたい本が見つかる。本を見ていると今、何が自分の課題になっているか見えてくる。勉強に、人生に何か問題を抱えたとき、図書館に行ってみよう。そこで課題や解決策が見つかるはずだ。